Bericht des Deutschen Hauses in Naruto

Ruhe（ルーエ　やすらぎ）

März　2007

17

The German House in Naruto

鳴門市ドイツ館館報　第17号

発行日　２００７年３月３１日
発　行　鳴門市ドイツ館
編　集　館長　田村一郎
〒779−0225
鳴門市大麻町桧字東山田５５−２
TEL：088 689 0099 FAX：088 689 0909
URL：http://www.city.naruto.1g.jp/germanhouse/
e-mail：doitukan@city.naruto.1g.jp

『ディ・バラッケ』全巻の翻訳・刊行完結

10年以上かけて取り組んできました、板東俘虜収容所の所内新聞『ディ・バラッケ』の翻訳・刊行が完結しました。鳴門市市制50周年を記念して1994年に始まったこの作業は、1998年の「第１巻」、2001年の「第２巻」、2005年の「第３巻」を経て、このたび「第４巻」に当たる最終部分に到達しました。

1917年９月末に創刊された『ディ・バラッケ』は、２年間にわたって毎週日曜に発行されましたが、そのうち１年半分は半年ごとに製本されて販売されました。それが、「第１巻」から「第３巻」です。難航したパリ講和会議も終りに近づき、いつ帰国するか判らなくなった1919年４月からは１カ月ごとにまとめることになり、９月まで６冊が出されました。また勤勉なドイツ兵は帰国船の「豊福丸」にもガリ版を持ち込み、「帰国航」として週刊６号分を出しています。今回は、この「帰国航」も一緒に収めました。

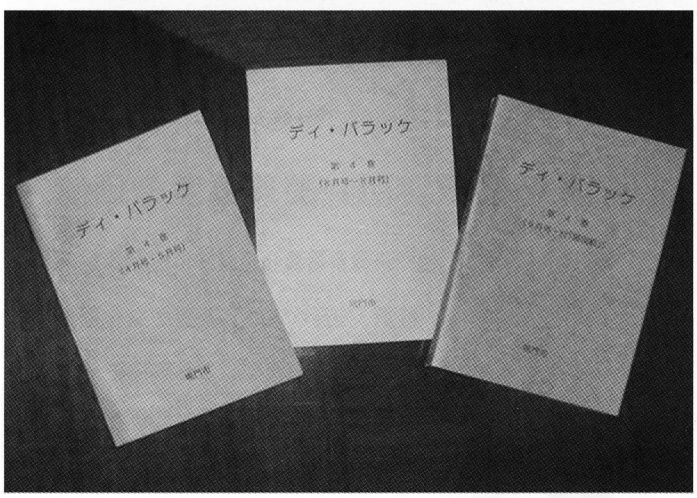
ヴェルサイユ条約締結をはさんでの時期だけに、ことに月刊６冊の内容は第１次大戦を振り返ってその原因を探ったり、あらためてドイツ人の特性を見直し、軍隊の再建などをふくめ祖国のあり方を論ずるなどシリアスな寄稿が相次ぎます。その中で革命後のロシアへの関心からか、マルクス主義やそのロシア版であるボルシェヴィズムについてふれたものが７本もあるのが目を引きます。

反面終戦後自由の増した収容所の空気を反映して、大麻山周辺への遠足や櫛木への終日遠足などの楽しさが描かれ、折野から大坂峠を越える21キロを歩き通した「競歩大会」の様子なども詳しく伝えられます。日本研究も盛んで、４月号ではクルト・マイスナーが円朝の人情話「福禄寿」を原文で30ページ以上にわたって紹介しています。

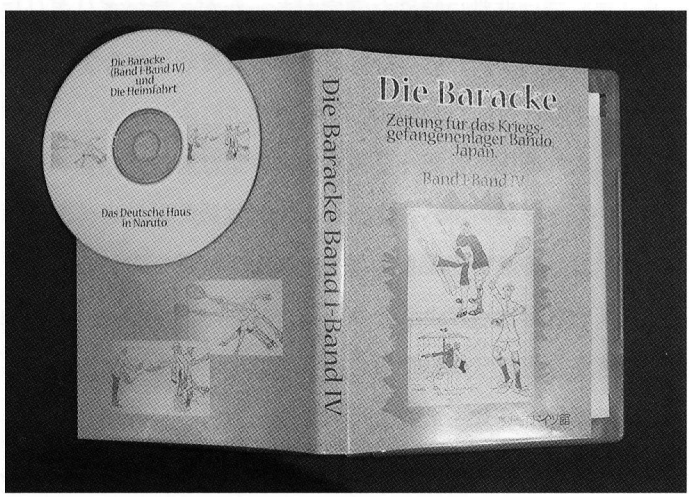
注目したいのは、同じく４月号で「慰霊碑論争」が交わされていることです。敵国に残された記念碑などの運命を紹介した消極論に対して、慰霊碑作りの中心に立っていたコッホが詳細な反論を展開しています。

鳴門市当局をはじめ、たくさんの方々の長い間のご支援ありがとうございました。翻訳を担当してきました「ドイツ館史料研究会」は、引き続き徳島収容所の『トクシマ・アンツァイガー』や松山収容所の『ラーガーフォイヤー（陣営の火）』など関連資料の翻訳や研究に従事してゆくつもりです。今後とも、よろしくご協力をお願いします。

なお『ディ・バラッケ』の完結を迎え、ほとんどひとりで編集の業務を担当してこられた史料研究会会長の川上三郎さんに、感慨と苦労話を寄せていただきました。



完結した『バラッケ　第４巻』



ドイツ語版『バラッケ』全巻のCD-ROMも完成

『ディ・バラッケ　第４巻』の刊行にあたって

川上　三郎

このたび、『ディ・バラッケ　第４巻』（実際には1919年４月から９月までの６冊なのだが、簡潔なのでこう呼ぶことにする）が『帰国航』と合わせ、刊行される運びとなった。「第１巻」の発刊が1997年３月のことだから、10年以上かけてすべての翻訳作業を終え、発刊できたわけである。やっと完成したかと思うと、感慨深いものがある。また昨年末には『ディ・バラッケ』全体と『帰国航』の「ドイツ語版」も、CD-ROMによる電子出版という形で刊行された。

私は編集作業と、印刷直前のDTPソフトによる割り付け作業を、日本語版については「第２巻」以降、またCD-ROMドイツ語版については全部を担当した。そこで、作業での苦労話を少しさせていただきたいと思う。

文章の割り付け作業で、時間を取られるのは字体の割り当てである。原文では、本文には基本的に当時のドイツ字の筆記体が用いられ、そのほか下線を付したもの、ラテン文字通常体、それにラテン文字ブロック体（詩など）などの使い分けがある。ドイツ語版ではそれらの文字と電子字体との一義的な対応に配慮したが、文章のタイトルなど一般的な書物の体裁を参考にして、一部でそうしなかったところもある。

日本語版ではゴチックと明朝体、太字と細字、大きな字や小さな字、それらを原文の表記を考慮しながら、なおかつ日本語での見栄えも考慮しながら指定していく作業は、素人編集者としてはとまどうことが多かった。さらに原文にロシア語やギリシア語、ヘブライ語など特殊な文字が出てくるときは、それを再現するための特別なフォントを探さねばならないこともあった。「第４巻」では非常に特殊な漢字があったが、幸いぎりぎりになって「今昔文字鏡」というソフトの存在を思い出して助けられた。

挿絵などは原図より縮小される点と簡単な説明文の追加をのぞけば、あまり苦労はしなかったが、謄写版印刷によくある原版の汚れなどの除去作業を画面上でするのは根気のいる仕事で、徹底して行えなかったところがある。また地図や星図の中の地名や星座名などを日本語に置き換えるにはとても手間がかかり、今回は時間的な制約もあって行えなかった。ご容赦願いたい。

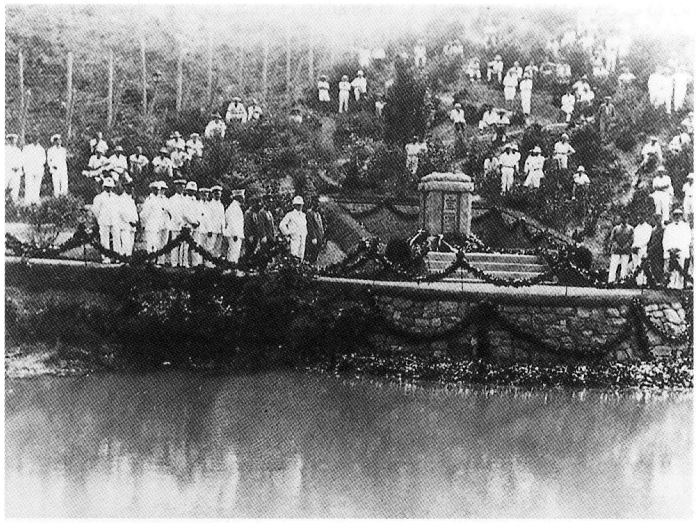
第４巻には、多色刷りのすばらしい絵がたくさんある。これらについては印刷当時のオリジナル通り再現できたかどうか怪しいが、大いに楽しんでいただけるものと思う。ただし経年変化のため印刷当時の色がかなり褪（あ）せているし、紙の黄ばみを除去するために行った編集作業にともなって、もとの色とはほど遠いものになっていることも考えられる。

そんなこんなでいろいろ苦労したが、この本を通してドイツ兵俘虜の実情がさらに多くの人に知られ、また研究に資することができれば、編集に携わった者としてこれにまさる歓びはない。

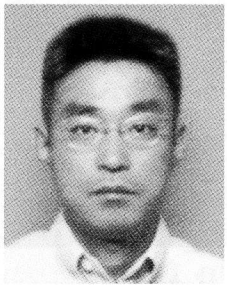
「ドイツ兵慰霊碑」が「県史跡」に指定

ドイツ村公園の「ドイツ兵慰霊碑」の「県史跡」指定が、２月２日県教育委員会定例会で正式に決定しました。昨年11月に県教育委員会から県文化財保護審議会に諮問（しもん）され、12月に審議会から県教育委員会に答申されていたものです。これで2004年１月の「ドイツ橋」に続きまして、ドイツ兵の手になる石造建造物２つが「県史跡」に指定されたことになります。

なお今後ドイツ館所蔵の『バラッケ』や音楽会・演劇などの「プログラム」なども、「県文化財」に指定される可能性が高まっています。こうした経過を申請の担当者である、市教育委員会生涯学習課の森　清治さんに解説していただきました。



「板東俘虜収容所」関連遺産の価値



鳴門市教育委員会生涯学習課　森　清治

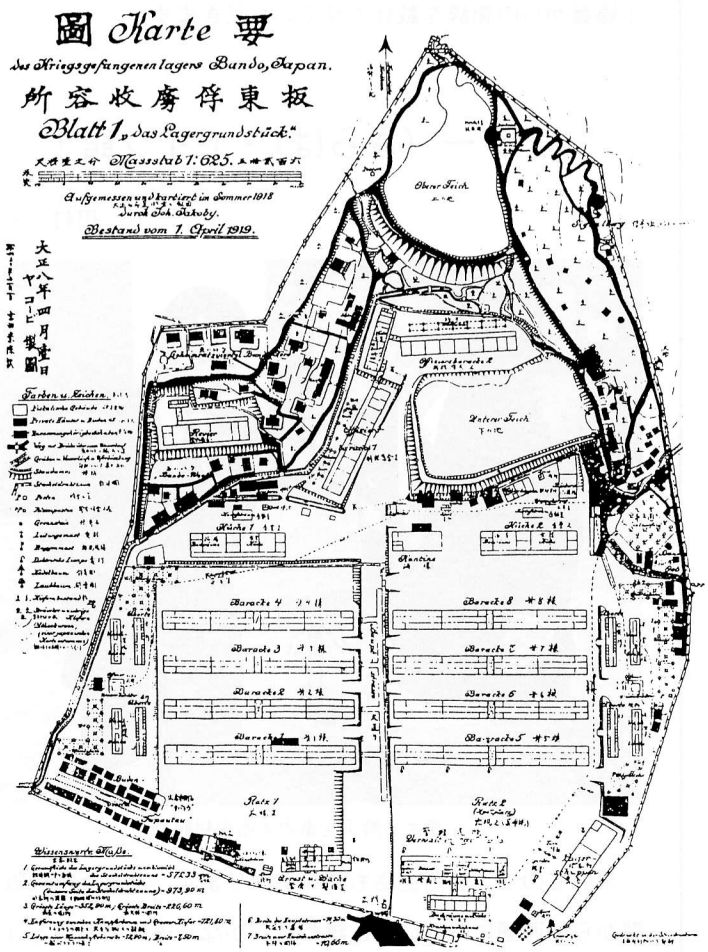
最近、近代の文化遺産が文化財として評価されるようになってきた。近代日本の発展過程や生活様式の変遷を示すものの中で、典型的かつ代表的な価値を有するものを「指定文化財」として保護活用

していこうという動きが示すように、明治・大正期の文化遺産が今脚光を浴びている。鳴門市大麻町には、日本が欧米諸国に国際的誠意を示すため「板東俘虜収容所」が建設された。数百人の村人が住む村が、またたく間に大都市さながらの異文化との交流・情報拠点と変わった。ここでは地域住民との交流や、建築・畜産等の技術指導が積極的に行われている。また音楽会や製作活動も盛んであったため、有形の遺産が多く残されている。この収容所の施設や俘虜の活動を、近代の文化遺産という観点からその価値を考えてみたい。

1920（大正9）年4月1日に、収容所としての歴史の幕を閉じた「板東俘虜収容所」は、その後旧陸軍演習場等として活用されたことが幸いし、約57,000㎡ あった敷地の1/3が当時の面影を残しつつ公園として活用されている。まず、当時俘虜ヤコービによって製作された収容所要図を参考にしながら現地で確認できる遺構を見ていくと、幾つかの建物の基礎が残っていることがわかる。子供広場南には兵舎（バラッケ）第５棟から第８棟の東半分の基礎が、その後の改変を受けつつも良好な状態で現存している。この兵舎群北側には、現在敷地を分断する形で道路が設置されているが、その北には池を囲むように第2食堂・浴室棟、酒保等が建設されていた。これらの建物跡についても、兵舎群と同様に建物の基礎が残っている可能性が考えられる。

ドイツ兵作成の「プログラム」(1)

ヤコービの図面は正確で、そこに描かれた「ケバ（図面上の▼▼マーク）」の表現により、敷地の高低差が理解できる優れた図である。収容所敷地は扇状地を利用して造成されており、地形の傾斜を活用した建物配置となっている。兵舎群が建てられた敷地は、第8棟が最も高い場所に位置し、第5棟のある南側に緩やかに下降するため、さながら段々畑のように見える。また西側の4棟の敷地は東側より二段低くつくられており、ここでも第4棟から第1棟にかけて下降する段を形成している。



ドイツ兵ヤコービ制作の「板東俘虜収容所要図」

収容所内外には、ドイツ人俘虜が設計・施工した建築物がいくつかあり、その内４つが現存している。「ドイツ橋」「めがね橋」「ドイツ兵慰霊碑」は、いずれも地元で採取された和泉砂岩を使った石造物で、俘虜の「バンドー」に対する思いが込められたものである。「ドイツ橋」は、大麻比古神社境内にある全長9.0mの切石円弧単アーチの石橋である。大正8年4月から6月27日にかけて地域のために建設された橋で、ドイツ人の設計・施工した石橋としては日本で唯一のものであり、平成16年1月30日に「徳島県史跡」に指定された。同じ境内に「めがね橋」があるが、こちらは県指定から外されている。

収容所敷地内の最奥部の池のほとりには、「ドイツ兵慰霊碑」が建設された。俘虜ハンス・コッホが企画し多くの賛同を得て、「板東俘虜収容所」とそれ以前の収容所で死亡した俘虜を慰霊する目的で建設された。1919（大正8）年8月末に完成した慰霊碑は、一辺1.20m・高さ2.00mで、四隅の和泉砂岩製の柱をつなぐ壁面には、御影石の銘文プレートが2枚ずつ計8枚埋設される。側面と背面のプレートには、亡くなった俘虜11名の氏名が、前面のプレートには「われわれの愛する戦友たちの思い出に

心はドイツ人らしく　戦いにおいては勇敢で　苦境にあっても誠実であり　死ぬことで自由の身になった」と

ドイツ兵作成の「プログラム」(2)

刻まれている。この慰霊碑も、本年2月16日に「徳島県史跡」に指定され、近代の文化遺産として評価された。

収容所外の南に位置する「国登録有形文化財」の「船本家牧舎」は、ドイツ兵と地元の大工が協力して建設し、俘虜の酪農指導が行われていた。1階の外周部と主な間仕切り部はレンガ積みで、2階床から上を木造とした混構造の建物で、薫製窯を付設し食品加工技術も指導していた。

また俘虜の生活の場であった兵舎も、収容所周辺に移築され今なお活用されている。この中で安藝家・柿本家の2件のバラッケが「国有形文化財」に登録された。柿本家バラッケは解体移築され、現在ドイツ館南の「道の駅」の「物産館」として活用されている。

収容所内で最も盛んだったのは音楽・演劇等の芸術活動とスポーツ活動であるが、これらのイベントを開催する際には色鮮やかな「プログラム」や「ポスター」が製作された。日本製謄写版印刷器を使った多色刷り印刷の「プログラム」は、俘虜の中に印刷・出版関係の職人がいたからこそ成し得たもので、技術の応用にかけた努力と創造する喜びを今に伝えるものである。所内新聞『ディ・バラッケ』を含むこれらの印刷物は、当時の所内の活動を鮮明に伝える貴重な情報源であり、歴史資料として評価できる。これらの資料についても、現在「徳島県有形文化財」の指定を申請中で、より詳細な情報の整理を進めている。

「ドイツ橋」の「県史跡」指定以降、「板東俘虜収容所」に関する遺産の登録・指定文化財化が増している。それは近代の文化遺産としての評価が定着し、文化財として将来に残すべきものとして価値付けられたからである。当時の詳細な図面が残り建物の配置や地形の状況が理解できるとともに、広範囲に敷地が現存するドイツ兵俘虜関連の収容所は板東だけである。実物が現存しているということは非常に重要であり、収容所の歴史を理解していく上でなくてはならない文化遺産である。鳴門市教育委員会では、この収容所がもつ本物の価値が広く理解されていくことを目指し、平成19年度から「指定史跡」化を視野に入れた発掘調査を実施する予定である。「板東俘虜収容所」は、史跡・建造物・歴史資料すべてが残っていることに文化遺産としての最大の価値があり、文化財としてすべての分野が評価されつつある。本格的な調査は始まったばかりであるが、この遺産を適切に保存し後世に継承していくためにも、「指定文化財」としての総合的な評価を得ることが必要であると考える。

田村館長退職、後任は川上三郎徳島大学教授

本年３月で館長の田村が退職することになりました。後任はこれまで「ドイツ館史料研究会」会長として『バラッケ』『トクシマ・アンツァイガー』などの翻訳・研究などをリードしてきました、徳島大学総合科学部教授の川上三郎さんにお願いすることになりました。まだ現職ですが、地域文化の振興を積極的に支援するという大学の意向に沿ってご協力くださることになりました。大学の事情もあり表向きは「研究指導員」という名称ですが、実質は「ドイツ館顧問」として、田村館長同様所蔵文献等の研究とその成果の紹介を軸に、ドイツ館内外の関連事項の指導・助言をお願いすることになります。

なお、長い間ドイツ館のまとめ役を務めてきました江川陽子さんも、この３月で退職することになりました。２人の挨拶と１職員からの謝辞を載せさせていただきます。

アデー（さらば）・ドイツ館！

田村　一郎

皇太子殿下を案内する田村館長

早いもので、鳴門生活も23年になります。たまたま大阪の先輩から関西圏に来ないかと誘われ、かなり遠い関西圏とは思いましたが、すっかり住みついてしまいました。1984年から2000年まで鳴門教育大学には16年勤務しましたが、退職後鳴門市に

お世話になり１年間市史を担当しましたが、２年目からドイツ館に移り６年を過ごしました。元気なつもりでもだいぶくたびれてきましたので、このたび板東俘虜収容所の新聞『ディ・バラッケ』の翻訳・刊行が完結したのを機に、北海道に帰ることにしました。

ドイツ館とのかかわりは、1987・８年に大学で所属していました社会系講座を中心に、文部省の特定研究として「板東俘虜収容所」と取り組むことになったのがきっかけです。私は松江豊寿所長を中心に、「『ヒューマニスト所長』を可能にしたもの－『背景』から見た『板東俘虜収容所』」という論文を書きました。はじめに明治以来の日本の「俘虜優遇」政策の背景に、幕末の「不平等条約」の解消とそのための国際的地位の向上という課題があったことを取り上げました。続いてことに松江所長の俘虜への対応の背景に、賊藩とされた会津出身という生い立ちと、日韓併合を前にした韓国での駐さつ軍司令官副官としての体験が大きな意味をもち、「敗者へのいたわり」を育てたと推測しました。その見方は今でも正しかったと思っており、少しずつですがそれを裏付ける資料も手に入ってきました。

ドイツ館に来てからのもっとも大きな仕事の一つは、板東俘虜収容所新聞『バラッケ』の翻訳・刊行でしたが、このことは本紙の初めでふれたので省きます。大学最後の2000年３月に、大和啓祐さんと書きましたガイドブック『どこにいようとそこがドイツだ』は比較的好評で、2003年・2006年に２度の改訂版を出すことができました。

2001年９月に創刊しましたドイツ館報「ルーエ（やすらぎ）」も、「日本語版」年３回、「ドイツ語版」年１回のペースで進み、職員の方や国際交流員のドイツ人の協力で、「日本語版」は本号で17号、「ドイツ語版」も６号に達しました。

2003年秋から全国の研究仲間と始めた『「青島戦ドイツ兵俘虜収容所」研究』も順調で、第４号まで続いています。これまで情報不足だった名古屋や静岡の収容所などばかりでなく、元俘虜を祖父にもつ人の現地でのお墓探しから、第１次大戦時にドイツにいた日本人の情報など多彩な論文が寄せられてきました。コスト削減のため手作りの原稿を輪転機で刷るなど、担当職員の苦労はたいへんなもので感謝に堪えません。

この研究会が基盤となって、「日本におけるドイツ　2005／2006」にはドイツ館で「全国フォーラム」を開くことができ、それに続く「徳島におけるドイツ　2006年」でも，徳島城博物館で徳島と板東にわたる松江所長をめぐるフォーラムを開催しました。

６年の間にいろいろ思い出になることがありましたが、やはり一番印象深かったのは2004年秋の皇太子殿下のご来館です。何か月も前から入れ替わり立ち替わり警備の人などが確認に訪れたり、細かな説明のプランを出させられたりで、とうとう心配していたギックリ腰が起き、針を打ってしのぎました。殿下ご自身は気さくな方でいろいろと質問され、かなり時間が超過し、周りの人たちははらはらしたようです。車に乗られる前に、楽しかったと微笑まれほっとしました。

映画『バルトの楽園』には直接はタッチしませんでしたが、史実のはっきりしない箇所やロケ村の建物に掲げるドイツ語など、側面からの協力をしました。映画のお陰で、ことに県外からの来館者が増えたことは嬉しいことの一つでした。

後任のことですが、幸い長らく翻訳等を一緒に取り組んできた徳島大学の川上教授が後を引き継いでくれました。現職との兼務で週に２日しか来れずたいへんでしょうが、豊富な知識とヴァイタリティでドイツ館を支えてくださるものと思います。私も今後とも、史料研究会や研究誌などできる範囲で協力させていただきます。

困難な中『バラッケ』の刊行を続けてくださった亀井市長をはじめ市の方々、ことに長い間ご協力いただいた飯原課長、中野副課長をはじめ文化交流推進課の方々とドイツ館の仲間たち、本当にありがとうございました。館内外の多くの方のご支援で、どうにか任務を全うすることができました。今後ともドイツ館の発展へのご助力をお願いしまして、お礼とさせていただきます。

退職に当たって

江川　陽子

この３月末日で、８年間勤務させていただきましたドイツ館とお別れすることになりました。この地は、「阿波のまほろば」とも呼ばれています。阿波一の宮大麻比古神社、四国八十八ヶ所一番・二番札所、そして第一次大戦が残した俘虜収容所跡地ドイツ村公園、世界にも珍しいドイツ兵俘虜の資料館、郷土が生んだ世界的偉人賀川豊彦記念館、先輩達が培ってきたこれらの貴重な歴史的遺産に囲まれた地に勤務させていただきましたことを、光栄に思います。その間、賀川豊彦記念館の開館、皇太子殿下のご来館、映画「バルトの楽園」の撮影、道の駅「第九の里」開駅の行事に少しでもかかわれたことは、私にとって良い思い出です。

ドイツ館は「宝の山」だと言って下さったお客様がいらっしゃいました。本当にその通りだと思います。その宝物であるたくさんの資料が、ドイツ橋・慰霊碑に続き、県の文化財に指定されそうとのことで、本当に喜んでいます。

２階展示場にある俘虜の一人（ステッヘル少佐）が書き残した「忍耐」の額と第九シアターは、私の心の糧になっています。

これからの人生「一期一会」だけで終わることなく、それに「残心余情」の言葉を付け加え私の言葉として心に秘め、これから残された人生を過ごして行きたいと思います。

今日まで無事大過なく勤務できましたのは、私を支えてくださった皆様方のお蔭です。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。心より厚く御礼申し上げます。

これからもドイツと鳴門市の友好の架け橋としてますます栄えますようお祈りいたしております。

田村館長及び江川さんへの感謝

日下　佳子

田村館長は、「館報　ルーエ」や「青島戦ドイツ兵俘虜収容所」についての研究誌の発行、また『ディ・バラッケ』の翻訳など多大な功績を残されました。私は２年余り、お手伝いをさせていただき、最初の原稿集めから製版されるまでの館長のご苦労を間近で拝見させていただきました。お手伝いをさせていただくことにより、研究に関わる皆様と手紙や電話だけでなく、直接お会いすることもあり、私にとっては何事にも変えがたい貴重な経験となりました。

また私たちスタッフを対象に、月に１度勉強会をしていただき、館の展示物を中心に、掘り下げた内容や俘虜研究の楽しみなど多方面にわたるお話をしていただきました。知識の浅い私にも大変わかりやすく、お客様をご案内するときには心強い自信につながりました。

北海道に帰られても、なにかにつけお力添えをいただくことと存じますが、どうぞよろしくお願い致します。最後になりましたが、田村館長の一層のご健勝をお祈り致します。

江川さんは長年の経験や知識を持って、私たちスタッフに親身なご指導をいただきありがとうございました。館内業務以外にも、積極的に館外の見回りをされたり、館前のお花のお手入れをされるなど、江川さんのドイツ館を想う気持ちを私達も受け継いでいきたいと思います。これからはご主人様との時間を大切に、どうかお体に気を付けて充実した日々をお過ごし下さい。

今後の行事予定

４月　１日（日）　ロスヴィタ・シュテーゲ　フルート演奏会
　　８日（日）　第３回「イースター祭り」
　　15日（日）　F-Ruhe フリューリングスコンサート
５月　４日（金）・５日（土）　ドイツワイン祭り
６月　２日（土）　ワインの夕べ
　　７日（木）～10日（日）　ドイツ風景洋画展
　　17日（日）　天羽明恵オペラ&ギターコンサート
　　24日（日）　ファチェロコンサート
　　30日（土）　ドイツ風木版画教室（第１回）
７月　１日（日）　ドイツ風木版画教室（第２回）
　　７日（土）　七夕コンサート
８月　１日（水）～31日（金）
　　『ディ・バラッケ』の世界（予定）
　　11日（土）～13日（月）　ドイツビール・ワイン祭り
９月　23日（日）　オクトーバーフェスト
　　29日（土）～10月４日（木）　ハーネ・花子書道展

編集後記

長い間ご愛読いただきましたが、「ルーエ（やすらぎ）」の編集を終えることになりました。自分で自分を送る号を作るのもおかしなものですが、これまでの成り行きから止むをえませんでした。お赦しください。つたない紙面作りでしたが、何人かの方の楽しみにしているとのお言葉が励みでした。次号から、新しい担当者が引き継いでくれます。これまで同様、お付き合いいただけますれば幸いです。

（田村記）